川越市立博物館

博物館だより

第38号

引札　万荒物紙手拭商内田伊之助（斉田美昭氏蔵）

引札とは一枚刷りの広告で、江戸時代から大正時代にかけて商品の宣伝や商店の開店・大売出しなどに広く用いられました。引札の「引く」には「引きつける」という意味のほか、「配布する」という意味もありました。江戸時代後期の風俗を記した喜田川守貞（1810年生）の『守貞謾稿』（別名『近世風俗志』）には、「報帖、京坂にて『ちらし』、江戸にて『ひきふだ』と云ふ」と記しています。当時の広告には、配る目的の引札、ちらしの他に、貼るための「びら」がありました。しかし、引札とびらは区別をつけにくく、今日では引札と総称していることが多いようです。

初期の引札としては、天和３年（1683）に呉服商の越後屋が江戸日本橋駿河町に開店した際に配った「現金安売かけ値なし」のものが有名です。江戸時代の引札は江戸や京、大坂などでさかんでしたが、それ以外ではまれでした。引札が一般化するのは明治時代以降です。明治・大正期には、商店が得意先へ配る正月用引札が全国的に大流行しました。正月用引札は錦絵の流れをくむもので、七福神などの縁起物や美人、子供、物語上の人物などの図柄が色鮮やかに刷られています。

ここに掲げた引札は、川越松江町の荒物商内田伊之助が配布したもので、大正６年（1917）の暦（略暦）が入った実用的なものです。配られた家では壁などに貼って１年を通して使うことができました。図柄は二宮金次郎と塩原太助です。塩原太助は、江戸に出て苦労の末に薪炭商で大成功した人物です。これをモデルに人情噺「塩原多助一代記」が作られました。特に愛馬青との別れの場面は有名です。両者とも立身出世の鑑として引札に多く描かれました。

武州河越住則重考 ～後北条氏配下の刀工たち～

1．謎の刀工、武州河越住則重

博物館にほど近い三芳野神社は、「お城の天神さま」として市民の方々に親しまれています。２月初旬ともなれば、境内の梅が一足早い春の訪れを告げて咲き始めます。

この三芳野神社には、刀身に社紋である梅樹・松樹を彫った１振の太刀が社宝として伝わっています。刃長３尺あまり、反りの深く付いた堂々たる姿です。中心（なかご）には、「武州河越住新儀惣兵衛允則重作　奉神納御太刀願主増井初左衛門尉但久　寛永十七年庚辰暦十二月吉日」との銘が切られています。

この銘から、寛永17年（1640）に松平信綱の家臣、増井初左衛門尉但久が川越城下の刀工則重に命じてこの太刀を作らせ、三芳野神社に奉納したことがわかります。ここで問題となるのが、この太刀を鍛えた則重という刀工です。

現在、則重の作刀はこの三芳野神社の奉納太刀のほか数えるほどしか遺されていません。このため、則重が他にどんな作風の刀を製作していたのか、師匠が誰であったのか、弟子がいたのかなど、多くの問題が残されています。

遠い昔、川越の城下に槌音を響かせていた則重という刀工は、いったいどんな人物だったのでしょうか。

当館では、ある愛刀家の方から則重の製作した刀剣を御寄託いただいています。この刀は、これまで知られていた則重の作風と異なり、則重の出自や技術の系譜を考える上で重要な手がかりになるものと考えられます。

そこで、今回特別のお許しをいただいてここに紹介し、他の作例と合わせて則重という刀工について考えてみたいと思います。

2．作刀時期・技術的系譜に関する疑問

まず、当館でお預かりしている問題の刀をよく観察してみましょう（第１図）。

この刀は、刃長36.0cm（１尺２寸）ほどの脇指です。切先から中心までの全長は48.2cmを測ります。

刀身は幅広で、切先によった上半部でわずかに反ります。造込は平造。棟の断面の形は家の屋根を伏せたような庵棟です。

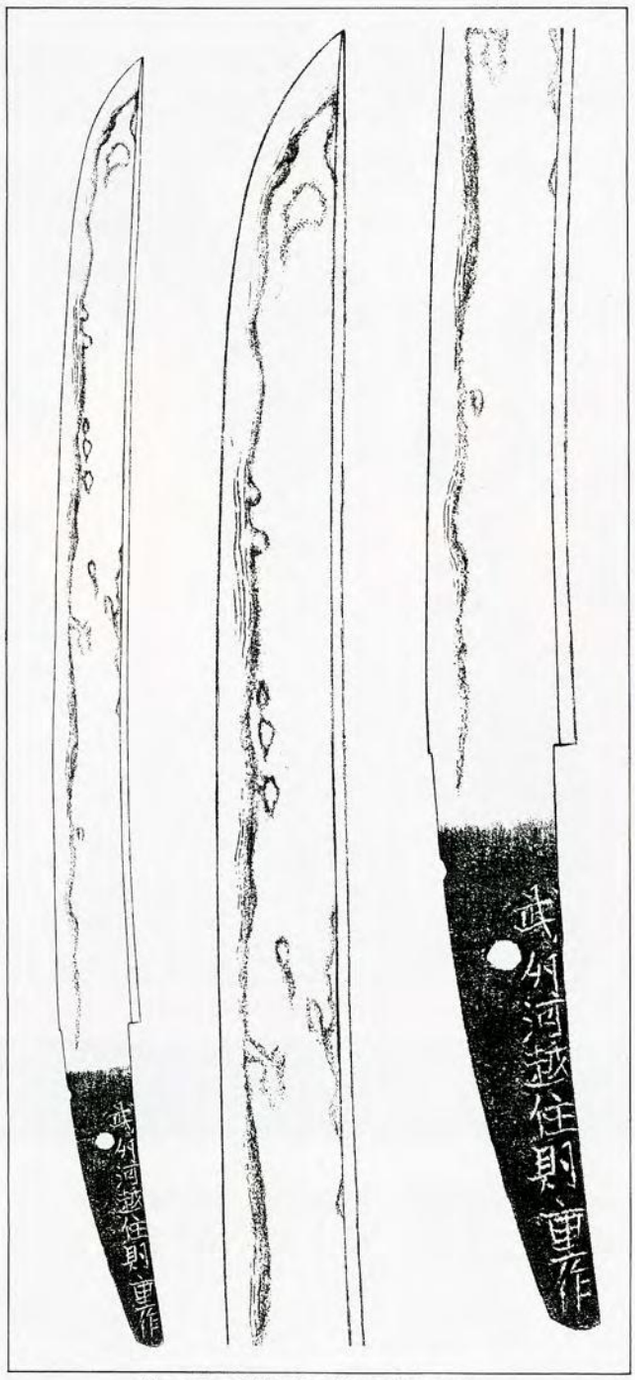
地金は黒ずんでザングリと肌立ち、渦巻きのような杢目肌がいくつも連なって見えます。

刃文は叢沸（むらにえ）の付いた湾（のた）れ刃がゆったりと上下に波打ち、所々に飛び焼きがかかります。全体的に焼きが弱く、匂口（においくち）はうるんでいます。帽子は尖って短く返ります。また、部分的に棟焼が見られます。

中心は刃側が緩やかなカーブを描いた舟形。中心先は刃上栗尻（はあがりくりじり）。仕上げに勝手下がりの鑢（やすり）が掛けられています。目釘穴は１ケ。

銘は指表（さしおもて）に「武州河越住則重作」と浅く切られています。

以上のようなこの刀の特徴から、いくつかの疑問が湧いてきます。



第１図　脇指 銘 武州河越住則重

ひとつは、則重の作刀時期が、戦国時代にまで遡るのではないかということです。

則重の作刀の中には、寛永11年や17年などの年紀の入ったものがあります。そのため、これまで則重は江戸時代初期を中心に活躍した刀工と考えられてきました。

しかし、刃長1尺前後、平造で身幅広く先反りするのは、戦国時代の脇指の典型的な姿です。

もうひとつの疑問は、則重の技術的な系譜が、小田原相州派や八王子の下原派に連なるのではないかということです。

中心を舟形に作るのは、正宗以来の相州物の特徴です。また、刃文は、沸が少なく働きに乏しいものの、切先に三日月形の飛び焼きを置くなど、小田原相州派の皆焼(ひたつら)刃を意識したものと思われます。

また、渦巻き状の杢目肌が連なる独特の地金は、下原派の刀剣に見られる「如輪杢」と呼ばれるものに似ています。

このように、則重の脇指と類似した刀剣を製作した小田原相州派や下原派は、いずれも小田原城を本拠とした戦国大名後北条氏配下の刀工集団です。

享和元年（1801）に鍛冶町名主中島孝昌によって書かれた『武蔵三芳野名勝図会』には、後北条氏が河越を支配した天文・弘治年間（1532～1558）頃、相州から平井某が来住し、天正年間（1573～1592）には、鳴惣右衛門、鳴工匠、加藤甚兵衛など平井の弟子十数人が鍛冶町にいたとの伝承が記されています。三芳野神社奉納太刀銘の「新儀」は「鳴」に通じるため、則重一門の居住を伝える記事として注目されます。

また、「則重」という刀工名にも興味が持たれます。刀工は師匠の名の一文字を受け継ぐことが一般的ですが、「重」の字のつく刀工名は、周重・康重・照重など下原派に多く見られます。盛期の下原派の作刀には、小田原相州派の影響が少ないものの、下原派の祖とされる周重の作刀の中には、相州上工の作と見紛う見事な皆焼刃を焼いたものがあります。

以上のことから、則重は室町時代後期、小田原城の後北条氏の命により、河越城下に来住した下原派の刀工だったのではないかとの推測が成り立ちます。

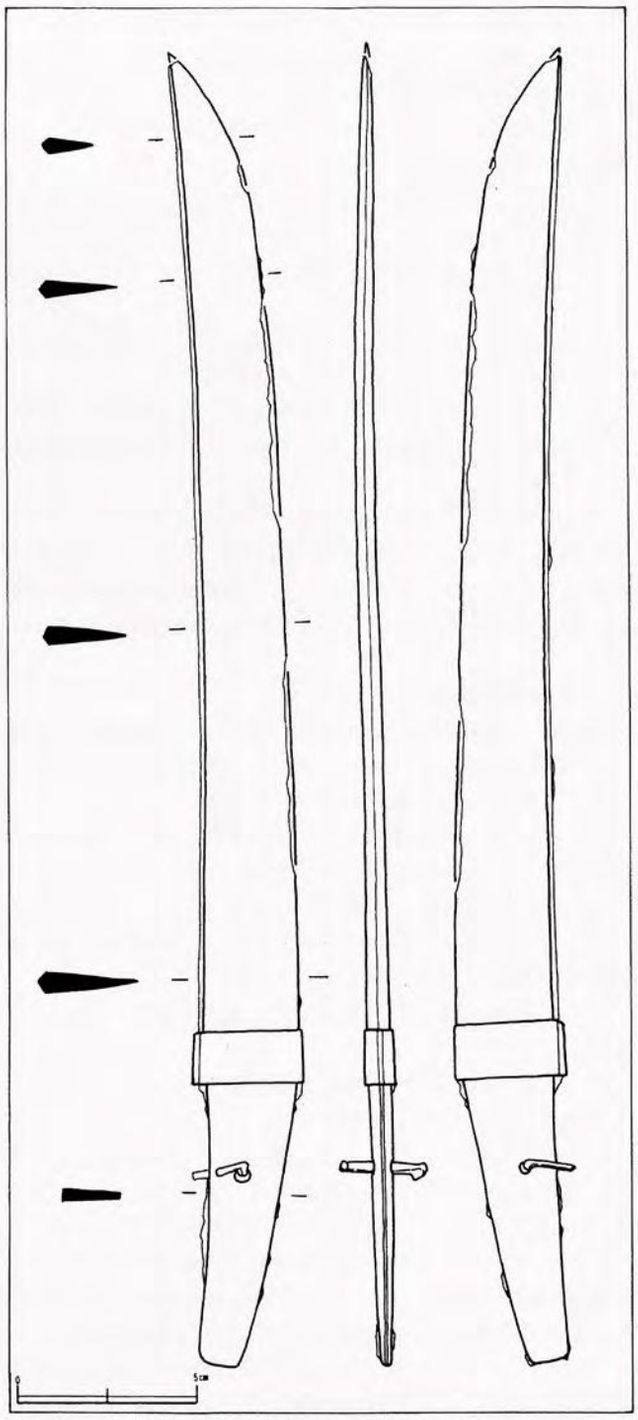
3．後北条系刀工群について

戦国時代、小田原に本拠を置いた後北条氏は、関東各地の多くの城を従えながら勢力を広げていきました。政治的・軍事的に重要な拠点には大規模な城とその城下町を置き、周囲には中小規模の城を配して、城と城とを結ぶ網の目のようなネットワークを作り上げました。下原派の刀工たちが居住した八王子や則重の住した河越は、こうした拠点的な城の城下やその周辺に当たります。

このように、後北条氏は、領国内の中核的な城の城下に刀工を集めて刀剣を製作させたのではないでしょうか。ここでは彼らを「後北条系刀工群」と呼びたいと思います。こうした後北条系刀工群には、2つのタイプが考えられます。

ひとつは、則重のように他地域の刀工たちを移住させる場合です。もうひとつは、その地域の伝統的な刀工たちを再編成して支配下に組み入れる場合です。

狭山市柏原に居住した製鉄集団は、後者の例に当たります。彼らは一般的に「柏原鋳物師」として知られていますが、鋳造と鍛造を共に行う鍛冶・鋳物師の集団でした。北条氏照は、永禄8年（1565）、この柏原の鍛冶たちに対して「年中廿丁宛、如何ニも鍛え候て鑓を打、進上申すべく候」という印判状を発しています。



第2図　脇指 無銘 （忍城跡出土）
『行田市郷土博物館研究報告vol.1』より

後北条系刀工によって作られたと思われる刀剣の実作も近年の発掘調査で発見されています。

忍城（行田市）は、『小田原衆所領役帳』に他国衆として記載された成田下総守の居城です。天正18年（1590）に豊臣秀吉配下の石田三成によって水攻めを受けたことでも有名です。

この城の堀跡からは、錆に覆われた1振の脇指が出土しました（第2図）。

刃長は1尺にわずかに足らず、28.0cm（9寸）。

刀身は幅広で、やや先反りします。造込は平造。棟の断面形は庵棟。

地金や刃文は、錆のため残念ながら不明です。

中心は舟形。中心先は栗尻。目釘穴は１ケ。

第１図の則重の脇指と姿がよく似ています。

この脇指は、いっしょに出土した陶磁器の年代から、16世紀後半のものと考えられます。

出土当時、この脇指は刀身に鉄鏃（はばき）を付け、中心には、柄木が釘で打ち付けられていました。鍔は付いていませんでした。伝世品には見ることのない実用本位のまことに質素な合口拵です。

後北条系刀工たちは、こうした実用向きの刀剣を数多く生産して領国内に供給していたものと考えられます。

戦国大名にとって、刀鍛冶に限らず、金属加工に長けた優秀な鍛冶・鋳物師集団を配下に置くことは軍事上重要なことでした。

後北条氏だけでなく、駿河国の今川義忠は島田派の刀工を召抱え、肥後国の加藤清正は同田貫の刀工に刀槍を鍛えさせました。また、江戸時代、徳川家康が越前康継を重用し、刀の中心に葵紋を切ることを許した逸話は有名です。

４．その後の則重

則重が、戦国時代、後北条氏の命によって河越城下に来住した下原派の刀工であったという仮説を踏まえて、もう一度三芳野神社の奉納太刀を見てみましょう。

刃長87.7㎝（２尺９寸）。刀身は重ねが厚く、深い反りがつきます。造込は鎬造。棟は庵棟。

地金は、小板目肌よく詰み、地沸厚く付いた精美な鍛え。

刃文は小沸出来、頭の揃った互（ぐ）の目刃。刃中には太い互の目足がぐいぐいと力強く入ります。

中心は舟形。中心先は刃上栗尻。鑢目は切り。目釘穴は１ケ。

以上のように、三芳野神社の奉納太刀は、第１図の脇指と地金・刃文とも全く異なります。

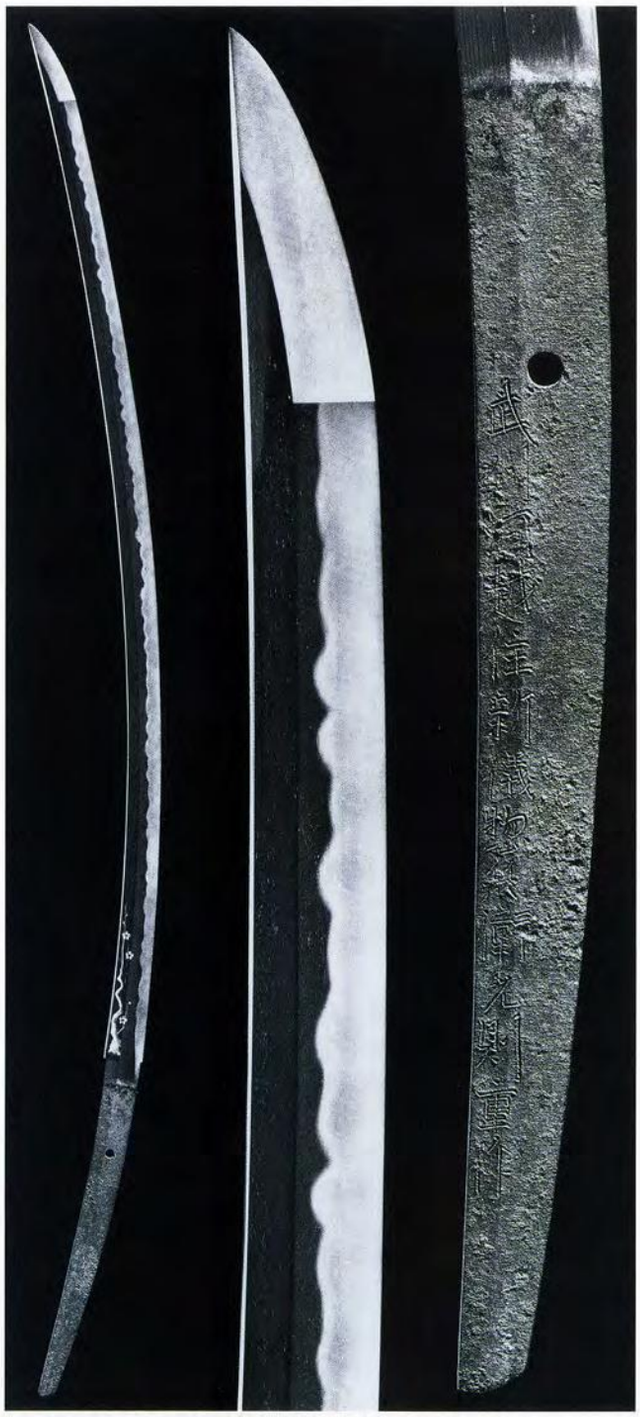
しかし、中心の銘は、書体や鏨の使い方が非常に似ており、同一人物によるものと思われます。ですから、則重に関しては、２代目・３代目といった代別は考えられません。

このことから、天正年間ごろ作られたと考えられる第１図の脇指から寛永17年の三芳野神社の奉納太刀までの間に、則重の作風が大きく変化したことが予想されます。

刀剣史の上では一般に、慶長年間（1596～1615）以前を古刀期、以後を新刀期と区分します。それは姿・地金・刃文などから、古刀と新刀が明確に区別されるためです。その原因として、帯刀の習慣によって刀の姿が変化すること。良質の鉄素材が全国的に流通し、地金が変化すること。為政者の好みや時代の気風が作風に反映されることなどが挙げられています。

しかし、何よりも刀工たちが、時代の変化を鋭敏に感じて、その時代にふさわしい実用と美しさを備えた刀剣を作ろうと努力したことが重要です。戦国時代に戦いのための実用刀を量産していた後北条系刀工たちも大きな転機を迎えます。

三芳野神社の奉納太刀の整った地金や頭を揃えた互の目刃は、江戸時代初期に一世を風靡した長曽根虎徹や江戸法城寺派を思わせます。まるで、こんなものも作れるぞと自分の技量の高さを誇示しているかのようです。



第３図　太刀 銘 武州河越住新儀惣兵衛允則重作
奉神納御太刀願主増井初左衛門尉但久
寛永十七年庚辰暦十二月吉日

則重は、天正18年（1590）に後北条氏が豊臣氏に下った後も、川越城下に住んで作刀を続けたものと考えられます。

おそらく三芳野神社の奉納太刀は、則重が晩年に増井但久に乞われて打ったもので、刀工としての誇りを賭けた入念作であったのでしょう。

「武州川越住則重」はこうした波乱の時代を駆け抜けた刀工の一人であったに違いありません。

（学芸係　岡田　賢治）

分館だより
——蔵造り資料館——

三番蔵展示資料紹介
万文の「荷箱車」

かつて蔵造り資料館が煙草卸商『万文』（小山商店）であったことは、御存知の方も多いことと思います。

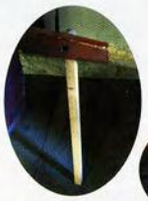
日清戦争の勃発した明治27年（1894）から煙草が専売制となる明治37年（1904）の10年間ほどが『万文』の全盛期でした。この時期、徳用煙草や高級煙草の製造を行っています。製造された煙草の商い形態は、数多くの店員が一斉に煙草を背負い売り歩く形態や、荷箱車で近隣へ配達したものを小売店が販売するという委託形態のものでした。

なお、荷箱車の細部については下の写真のとおりです。

荷箱車の細部情報

背面扉を開けた状態

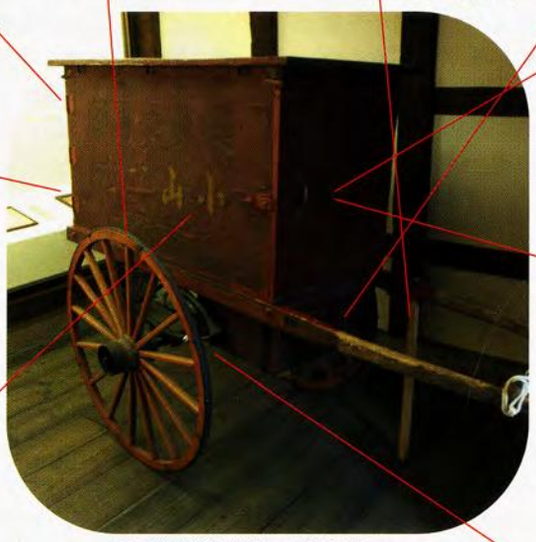
車輪
（車輪の直径…98cm）


スタンド
（前）

スタンド
（後ろ）

引き出し

荷箱背面文字
「　分
山　小　」



前面扉

前面扉を開けた状態

荷箱側面文字（両側）
「煙草元売捌
小山商店」（右書き）

○　荷箱車寸法…全長218cm
全幅116cm
高さ157cm

（荷箱部分寸法…長さ128cm
幅　60cm）

板バネ式のサスペンション構造

※荷箱車は、三番蔵に展示しています。ぜひ、御覧ください。

トピックス

百日紅（さるすべり）を植樹　（川越城本丸御殿）

平成15年１月30日、川越中央ライオンズクラブから、川越城本丸御殿の家老詰所前に百日紅の木を御寄贈いただきました。

樹齢100年を超えるこの木は、さいたま市の民家から引き取られ、同クラブの皆様によって植樹されたものです。

今夏、薄紅色の花が咲くことを楽しみにしています。

百日紅の植えられた川越城本丸御殿に、ぜひ足を運んでみてください。

大袋新田の弁天講

弁天様へのお供え

お高盛り作り

お高盛りの配膳

川越市南部の大袋新田地区では、毎年３月と12月の２回、弁天講が行われています。期日は、かつてそれぞれの月の11日でしたが、近年は11日に近い日曜日となっています。

この弁天講は、福徳神である弁財天に高く盛った御飯（お高盛り）や団子、けんちん汁等を捧げてお祝いをし、講員一同が家内安全など各人の祈りをこめてそれらの飲食をするものです。春の行事にはその年の五穀豊穣への願いが、晩秋の行事には収穫への感謝が込められているといわれています。また、飲食を共にすることで講員同士の親睦を深めることにもつながっています。

講に関しては、古文書等の記録が少なく、行事自体もほとんど口伝のため、お高盛りの行事との関連など詳しい由来や来歴はよく分かっていません。しかし、江戸時代中ごろから始まったと伝えられており、戦時中の混乱期にも一度も休止することなく現在に至るまで連綿と受け継がれています。かつては地区内36軒の講員により構成され、毎回持ち回りの宿で行っていましたが、現在は24軒となり当番制をとって愛宕神社境内の自治会館で行っています。行事に参加する者は家の戸主の場合が多く、年齢も40歳代から80歳代までと幅広く、皆熱心に参加しています。

現在の弁天講は、24軒の講員の内、当番に該当した６軒の講員によって準備から後片付けまで一切が仕切られ行われます。本番1週間前、当番の６人が集まって相談をして役割分担を決め、買い物の手配をします。そして、各講員の家を回って出欠の確認をし、１軒あたり２合の米と会費を集めます。

行事の当日は、当番の６人が朝自治会館に集まり、手分けしてけんちん汁や高盛り飯用の御飯炊き、会場の設営、自治会館内に祭られている弁天様へのお供えを準備します。この弁天様への供物は、講員たちが食べるものと全く同じものが用意されます。ただ、弁天様へのお高盛りの御飯が練ったものであることと、それを盛る茶碗が専用のものであることが相違点です。

準備が一通り終わったお昼前になると、講員たちがひとり又ひとりと集まり、銘々が弁天様にお参りを済ませて着席します。参加者全員が集まった正午、いよいよ弁天講が始まります。当番長の挨拶の後、乾杯をし、皿に盛られた料理とけんちん汁を食べながら歓談します。

場が盛り上がり、話の輪があちこちで出来てきたところで、高く盛られた御飯のお高盛りが参加者全員に振舞われます。このお高盛りは、とんがり帽子の形をした容器に御飯約２合を棒でつついて詰め、それを縁いっぱいに御飯を詰めた茶碗の上にかぶせて作られます。出されたお高盛りは、口いっぱいにほおばって全て食べたものでしたが、さすがに今では全部食べる人はなく、残りの御飯を持ち帰り家族で分けて食べています。

また、この席ではお供え物の団子が参加者に３個ずつ配られています。この団子のことを地元の人は「オイシ」と呼び、家に持ち帰ってまず神棚に上げ、できるだけその日のうちに家族一同で分けて食べます（地元では食べるとはいわず、いただくといいます）。その際、包丁は使わず手でちぎり、頭をたれてお祈りをしてから食べます。その日残った団子は、焼いて食べてもよいが煮て食べてはいけないといわれています。

ところで、人々が神仏と共に食事をし、特に多量の飲食を伴う行事は、各地に散見することができます。この弁天講のように講など特定の目的を持った集まりの中で行われたり、「強飯（ごうはん）式」・「一升飯」などと呼ばれて飲食そのものが行事となっているものなどその形態は多様です。そしてまた飲食の内容も、白飯のみならず小豆飯やうどん、甘酒などさまざまなものがあります。

しかし、こうした行事は、人々の生活変化や価値観の多様化などにより、近年急速に減少しているのが現状です。埼玉県教育委員会発行の『埼玉の祭り・行事調査報告書』（平成９年）では、「お高盛り」の行事として熊谷市、幸手市、三郷市、吉見町などに点在していることが報告されています。川越市内では、この弁天講のほか、かつては鯨井地区の字犬竹で「一升講」と呼ばれる行事が行われていました。

江戸時代からの古式を受け継ぎ今に続く大袋新田の弁天講は、大変貴重な行事であるといえるでしょう。

※平成15年は、３月９日㈰と12月７日㈰に行われる予定です。

「川越の職人」コーナー

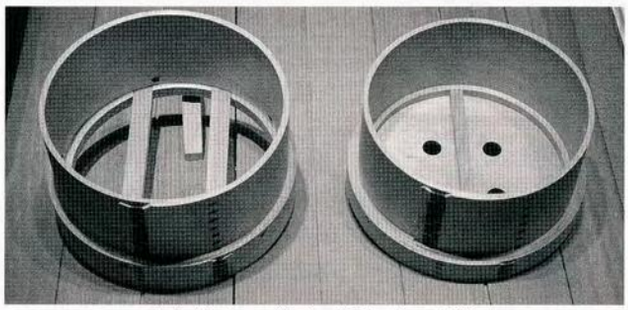
曲物師（まげものし）

城下町川越の伝統的な職人の仕事場を再現する「川越の職人」コーナーでは、毎年1回の展示替えを行っています。

平成15年10月頃までの展示

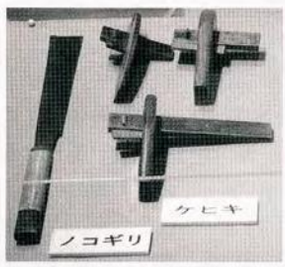
曲物とは、ヒノキ、スギ、エゾマツなどの木材を薄く割って板状にしたものを円形あるいは楕円形に曲げ、桜の皮で綴じて底を付けた容器のことです。曲物製品には赤飯などをふかすセイロ、粉をふるうフルイなどがあります。曲物を作る職人は曲物師とも呼ばれます。

川越では、主にセイロが作られています。セイロには底の部分が、2本桟（さん）のサンゼイロと、板に穴があいている板ゼイロの2種類があります。昔は釜の大きさに合わせて作られるサンゼイロを多く作っていたのですが、今では鍋でも使用できるように改良された板ゼイロを作る事も多くなったそうです。



サンゼイロ（左）、板セイロ（右）

かつて市内には、材木からとった薄材を曲げて曲輪に加工する職人がいましたが、今では他県から曲輪を仕入れて製品にする仕事を行っています。仕入れた曲輪は、まず押さえ付けてくせを直し、製作する品物の幅に合わせてケヒキで切り込みを入れて割ります。合わせる部分やメンと呼ばれる部分を小刀で削り曲輪の内側と外側がぴったりと合うようにします。これらの加工を施してから型板や定規に合わせ、品物の大きさの印をつけます。曲輪を接着する糊には、飯粒を練って作った続飯糊（そくいのり）が用いられています。ぴったりと接着するようにキバサミではさみ、半日ほど乾かし、接着部分をさらに桜皮で縫い合わせます。桜皮は、小刀で削った後、裁ちバサミで1㎝ほどの幅に裁ち、これをハリと言われる道具を使って縫い綴じます。曲輪の接合が終わったら縁をカンナで仕上げます。そして外周の違う曲輪を数枚組み合わせてタタキ棒で叩き込み、曲物を作っていきます。こうして作られたセイロは、東京の問屋に卸します。



川越の曲物師は、明治から昭和にかけて多く存在しましたが、現在ではプラスチックやアルミなどの容器におされ、需要が減るとともに少なくなってきました。

今回の展示に際し、お話を伺うことができた宮元町の三村（みむら）眸（ひとみ）氏は、父親である先代の三村源太郎氏からセイロの製法を学び、中華セイロも東京で修行して習得したそうです。今では、需要も減り仕事場も縮小しましたが、曲物作りを続けています。「自分が健康なうちは曲物作りを続けていきたい」と、作業する手を止めることなく語る姿に、曲物師としての職人魂を感じました。

今回の展示に際し、御協力いただいた三村眸氏、資料寄贈者の篠崎清吉氏に心よりお礼申し上げます。

第21回企画展　はにわは語る

平成15年３月21日㈮～５月11日㈰

人物埴輪（笄帽をかぶる男）

人物埴輪（頭巾をかぶる男）

人物埴輪（鍔付帽子をかぶる男）

いずれも生出塚遺跡出土　鴻巣市教育委員会　蔵

特別展示室の展観

埴輪は博物館の展示品の中でも、とりわけ人気の高い資料のひとつです。虚空を見つめる巫女のつぶらな瞳、首をかしげた馬の愛らしいしぐさ。埴輪はさまざまな表情をもち、見る人を魅了して止みません。しかし、こうした埴輪は、最初から観賞用として作られたわけではありません。

古墳の発掘調査では、墳頂から家形埴輪が、石室の入口付近から人物・馬・大刀などの形象埴輪が、また、墳丘の周囲から円筒埴輪列が発見されます。

当時の人々は、なぜこのようにたくさんの埴輪を古墳に並べたのでしょうか。また、埴輪はどんな人々が作っていたのでしょうか。この展覧会では、みなさんといっしょにこれらの謎について解き明かしていきたいと思います。

本展を通じ、ものから人や社会を考える考古学の醍醐味を少しでも味わっていただければ幸いです。

・・・・・利用の御案内・・・・・

◆開館時間　午前９時から午後５時まで（ただし入館は４時30分まで）

◆休館日　月曜日（休日は除く）、毎月第４金曜日（休日は除く）、休日の翌日（土・日曜日は除く）、年末年始（12／28～１／４）、燻蒸期間（７月上旬頃予定）、特別整理期間（12月中旬予定）

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	3館共通券〈博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館〉
大人	200円（160円）	100円（80円）	100円（80円）	300円
学生・生徒	100円（80円）	50円（40円）	50円（40円）	150円
児童	50円（40円）	30円（20円）	30円（20円）	80円

●（　）内料金は、団体〔20名以上、１名につき〕の場合。

●開館時間・休館日は、３館とも同様。（燻蒸期間・特別整理期間は博物館のみ休館）

交通案内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス　「札の辻」下車徒歩８分

発行日　平成15年３月10日　　発　行　川越市立博物館

〒350-0053　川越市郭町２丁目30番地１　☎ 049-222-5399
FAX 049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています